

No.114

公民館だより

平成14年3月

宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

成人の日

由良地区公民館長 飯澤登志朗

成人の日が国民の祝日と定められたのは昭和二十三年ですが「大人になったことを自覚し自ら生き抜こうとする青年を祝います」ことを目的としています。

今年も全国各地で成人式が開催されました。昨年は大変な荒れようで式の開催の可否や方法が話題となる状況でしたが、今年も那覇市での酒だる持ち込みを発端に逮捕者まで出る等やりたい放題の会場がありました。終戦直後の混乱がまだやまない昭和二十一年十一月に某地の

青年団が二十才を迎えた青年を招いて「青年の英知と力を結集し祖国再建の先駆者として自覚をもつて行動すべきとき」と激励し前途を祝したことが、その趣旨と意義が高く評価され、昭和二十三年に国民の祝日となつたようです。

その崇高な期待を込めて作られた「成人の日」が今は単なる小・中学校の同窓会的なノリになつてしまふのは残念です。旧友に久し振りに会える嬉しさは分かりませんが、新成人としての自覚を大切にしてほしいと

ころです。

宮津市の成人式は、一月十四日に二百十余名の出席があり、由良地区からも十一名の出席がありました。

めでたく成人の日を迎えられた皆様やご家族の方々に心からお祝いを申し上げます。

近年、不況で失業者が増加し就職難で大変な時代に大人の仲間入りする若者たちですが、新聞の記事によりますと、新成人の七十五%が自分を大人だと思わないと答えています。

調査対象者の九割近くが学生であったことを割引いても「経済的に自立していない」、「精神的に自立していない」、「世間を知らない」等々、現実の生活は自立とはほど遠くアルバイトをしていても、学費や生活費にと考えている者は少なく親への依存度は高いようです。

新成人にとって初めての選挙権行使は京都府知事選挙になると思いますが、責任をもって選

挙に臨んでほしいと思います。

最近の選挙について若者の投票率の低下があります。

自分の生活と政治とは関係ないと考える人が、全有権者のうち若い人ほど高くなっています。自分が世の中を変える位の気概を見せてくれることを期待しています。

最後になりましたが、由良地区出席者の木谷佳美さんが新成人を代表(男女各一名)して、「これまで育ててくれた両親やどんな時でも励ましてくれた多くの友人たちに感謝したい」と答辞で結んでくれました。

いつまでも感謝の気持を忘れず、明るく歩んでくれることを願って止みません。



行事報告

主事 枝川 隆 亮

◎十一月三日(土)

文化祭

良を探訪したいと考えておりま
す。

り無事終了できましたことを厚
くお礼申し上げます。

◎十二月七日(金)

人権学習会

◎十月十四日(日)
歩こう会

秋晴れの日、子供会連絡協議
会の協賛をいただき「歩こう会」
を実施、由良岳山麓約7軒を子
ども二十四名、保護者、一般二
十九名の皆さんとハイキングを
しました。

これは宮津市の「子どもゆめ
基金・子どもの体験活動助成」
事業に基づいて実施した行事で
す。

今回は「水を大切に」という
テーマで行いました。

如意寺では「歴史を探る会」
の大森章弘さんに身代り地蔵の
説明をしていただきました。

水源地では管理者の上良高祥
さんに水源から消毒、滅菌など

水道のしくみについてくわしい
説明をしていただきました。

普段、蛇口を開けると当然の
様に出てくる水ですが、年中無
休しかも朝七時から晩十時すぎ
まで、四回の保守点検を実施さ
れている水源だからこそ、今後
は「水」を一層大切に使用しな
ければいけないと参加者全員想
いました。

七曲八峠の首挽松でも大森さ
んに分かりやすく詳細な説明を
していただきました。

上良さん、大森さんありがと
うございました。

九時に里センターを出発し、
石浦もみじ公園に昼前に到着、
昼食後解散にしました。

健康で歩ける幸せを満喫した
半日でした。

来年はコースを変えて丹後由

強風雨模様で人出が心配され
ましたが、大勢の地区民の皆さ
んにご来場を頂き、盛会裏に終
了することができました。

一階ロビーでは、昨年健康
フェスタで披露された由良練り
込み太鼓のビデオが放映され終
日賑わいました。

二階展示会場では、生花教室
の華麗な生花に囲まれて、ちど
り・かもめ園児の絵画を始め、
小中学生の書道、写真クラブの
秀作等観覧者の目を楽ませて
いただきました。ありがとうございました。

今年三〇八点の展覧を頂き
展示パネルを増設しました。

婦人会主催のバザー会場、有
志の喫茶コーナーも大盛況であ
り、地区民の皆様のご協力によ

宮津市社会福祉協議会の森本
照幸先生を講師としてお招きし
「いのちがあぶない」というテー
マで講演をしていただきました。

人権を守るためにはどうするの
か。最近特に多い乳幼児への虐
待の実態、差別言葉の紹介等多
くの勉強ができました。

私達が普段使用している言葉
の中に、差別用語がたくさん存
在していることは驚きです。

由良幼少PTAの会員と、公
民館関係者計五十一名の参加で
した。

◎一月十四日(月)

成人式

宮津市で成人を迎えられた方
は二七八人でした。

由良地区では次の十四名の方が成人を迎えられました。

(順不同敬称略)

- 松林 俊也 小田原利江
- 木谷 佳美 森本 友子
- 廣田 勉 間縞 陽介
- 大森 祐子 瀬田 憲司
- 千坂 幸子 山下 修
- 山下 結 野間 英実
- 川崎 祐介 岡田千賀子

おめでとう 新成人
輝かしい未来に向って
大きく羽ばたいてください。



「さわやか賞」受賞

由良小学校 校長 水谷 洋子

由良小学校が、平成十三年度
京都府教育委員会「さわやか賞」
教育長賞を受賞し、「心の教育振
興フォーラム」で、表彰してい
ただきました。

「さわやか賞」というのは、
平成五年度に、京都府教育委員
会が、府内の各学校において、
豊かな心を育む体験的な教育活
動が、積極的に取り組まれるよ
うにというねらいで設けられた
表彰制度です。

由良小学校で取り組んでいる
由良地域を生かした地域の人々
とのふれあい活動やボランティア
活動、環境へ働きかける活動
などの教育活動が、由良小学校
の児童に豊かな心を育むととも
に、地域の人々に共感をもって
受け入れられ、さわやかな印象
を与えるものとして高く評価さ

れたものです。

二十一世紀を迎え、これから
の時代は、変化の激しい、先行
き不透明な厳しい時代と考えら
れます。このような時代に、子
ども達に、次のような「生きる
力」を育むことが必要です。

- 一 自ら課題を見つけ、自ら学
び主体的に判断し、行動し、
よりよく問題を解決する能力。
- 二 自らを律しつつ、他人と協
調し、他人を思いやる心や感
動する心など、豊かな人間性
とたくましく生きるための健
康や体力。

これらの「生きる力」を育む
ために今、学校では、多くの知
識の習得に偏りがちであったこ
れまでの学校教育を見直し「自
ら学び自ら考える力」を育む教
育へと変革を図っています。

子どもたちの個性を生かしな
がら、学び方や問題解決などの
力を育むことや、体験的な学習
を取り入れた学習を進めていま
す。「生きる力」の中核となる「豊
かな心」を育むことも、道徳や
各教科など、生活全体で取り組
んでいます。

由良小学校では、「総合的な学
習の時間」に「由良キッズふれ
あいネットワーク」であいい
れあい「まなびあい」とテーマ
を設定し、地域の自然や歴史、
文化、人々と出会い、「ふるさと
で、ふるさとの人から、ふるさ
とを学ぶ」ことにより、由良地
域を愛し、やさしさや思いやり
にあふれる心豊かな子どもを育
てるとともに、自分の生き方や
考え方を確かにし、自然や人々
と「ともに生きる力」を育みた
いと考えています。

言いかえれば、「教えられる学
び」から「自分からの学び」へ
の「学び」のスタイルを身につ
けさせようとしています。

子どもに、それらの「生きる力」を育てる教育活動に、由良地域の皆さんより、他方面から多様なご支援をいただいております。

したがって、このたびの「さわやか賞」は、由良小学校の子どもはもとより、教職員、保護者、ご支援いただいている由良地域の皆さん全員に、受賞の榮譽を授かったと考えております。

そのお礼と感謝の思いをこめて、子どもたちのさわやか活動の取組の一部を紹介します。

一 あいさつ運動

毎週水曜日の朝、児童会役員が、児童通用門に立ち、あいさつの声かけをしています。

おはようの他にも、ありがとう、しつれいします、すみません(ごめんなさい)が、自然に言えるように、「おあしす」運動にも取り組んでいます。

二 浜の子でっかい砂浜教室

七月二日の丹後由良海水浴場の海開きに、異年齢班で「砂の



造形」活動に取り組んでいます。

砂に海水をかけると固めやすくなり、一時間半で、全校児童が力を合わせて世界に一つしかない砂の像を作ります。

その前には、製塩、浜の生物、北前船などの話をゲストティーチャーより聞いて、ふるさと学習も深めています。

三 もち米作り体験活動

先の公民館だよりでお知らせしましたように、田中修吉さんの田をお借りして、もち米作り

に挑戦しました。田植え、草取り、稲刈りなどの体験をするのができました。

お正月前には、しめ縄飾りを作ることもできました。

十一月には、お世話になった人々を招待して児童会主催の収穫祭を開催し、学校で栽培したさつまいも入りの「いもおこわ」を一緒に味わっていただきました。

また、地域の配食ボランティアさんのご協力で、もち米の一部を、独居高齢者の皆さんにも食べていただきました。

丁寧にやり方を教えていただいた地域の皆さんと、ふれあいながら、思い出に残る体験をすることができました。

四 社会福祉体験学習とボランティア体験活動

ア 「祖父母学級」とふれあいコーナー

九月に、授業参観を持った後「ふれあいコーナー」で、竹細工、お手玉、ちぎり絵などの作

り方を教わったり、こま回し、けん玉、百人一首などの昔からの遊びを体験し、祖父母や地域の高齢者の皆さんと、心のふれあいを深めています。

イ ペーパーフラワー作製
「敬老会」では、八十五歳の皆さんに、全校児童で作製したペーパーフラワーの花束を、お祝の言葉をそえてプレゼントしています。

ウ 「はまなす苑」訪問

四年生では、「人に優しい町・環境にやさしい町」をテーマに学習しており、リコーダーや歌の演奏やゲームによるふれあいを深めました。

デイサービスの人々を元気づけに行ったところが、皆さんの元気で明るい姿に、四年生の皆は、逆に元気づけられて帰ってきました。心温まるふれあいが出来ました。

エ 地域の環境美化

海開きの前には、全校児童で、また、四年生は、一学期と二学

期に浜清掃を実施し、よりよい環境づくりの学習をしました。

六年生は卒業前に、由良駅へ

「お世話になります」の思いを込めて、プランターの花をプレゼントしています。

オ 省エネルギー学習

五年生が、環境学習で地球温暖化防止の学習に取り組み、地域の婦人会の人たちとともに、二酸化炭素を減らすための我が家の省エネルギープランと、啓発の呼びかけを行いました。

活動の一部を紹介しましたがこのように、由良地域の自然や人々との出会いやふれあい、様々な体験活動を通して、子ども達の心を揺さぶる感動を体験することができ、「共に生きる」大切さに気付き、由良地域を愛する心が育まれていくなど、多くのことを学ぶ機会に恵まれました。まさに、保護者や地域の皆様のご協力と、心より厚く感謝とお礼を申し上げます。

子ども達一人一人が、生活と結び付き体験に支えられた「さわやか活動」によって学んだことが、自分を高め、社会を豊かなものに変えるとき、「学びが力」となります。

「子どものときに、大人になるための大切な力を貯えるもの」という発達の原則を大切に、しっかりと、子どもの心を耕していきたいと考えております。

この受賞を出发点とし、学校、保護者、地域の皆様と手を携えて、子どもたちに「生きる力」を培っていききたいと考えております。

今後とも、ご協力とご支援をよろしくお願いいたします。



さわやか賞受賞

由利 隆 博

由良小学校が「さわやか賞」を受賞。正直、この賞が、どんな賞なのか、ぼくには、はじめ、よくわかりませんでした。でも、その表彰式に京都まで、校長先生と船野君といっしょに出席すると聞き、毎日、放課後、熱心に発表の練習をくり返すうちに、だんだんと実感として「なんだかこれはすごいぞ。」と思えてきました。

そして、当日は、家族と一緒に、京都の会場へ行きました。六百人くらい入れる大きなところで、他校の先生方の受賞されている様子を見て、ぼくは「一人じゃない、大ちゃんもいる。」

「由良小学校のみんなの代表なんだ。大丈夫。大丈夫。」と自分の気持ちを落ちつかせました。いよいよ、由良小学校の順番

になり、マイクの前に立つと、心臓がドキドキとしましたが、しゃべり出すとだんだん落ち着いてきました。みんなの取り組みが、スライドとぼくらの発表で終わった時は、大きなたくさん拍手をもらいました。ぼくは、ホッとし、とてもうれしかったです。

これからも、発表の中にもあふれあいを通して、たくさんの方の「心のふるさと」になるよう、ぼく達に何が出来るかを考え、行動し、素晴らしい学校や町にしていきたいです。ありがとうございます。

心の教育振興フォーラムでの発表

六年 船野 大

由良小学校は、さわやか賞を受賞しました。

児童会での活動のあいさつ運動や、きれいな浜を守る浜そっじのボランティアなどをがんばったからだと思いました。

それを、ぼくと由利君で発表すると聞いた時は、少しびっくりしたけど、みんなの代表として、がんばろうと思えました。

それからは、ずっと、放課後残って、練習を毎日やりました。

限られた時間で由良のいい所を発表するには、時間が少なすぎて調整するのに、苦労しました。

当日、会場につくと、えらそうな人がいっぱいいて、すごくさん張感がありました。

校長先生が表彰された後、ぼくたちの発表をしました。

ステージに上がると、もっとさん張しました。

由良小の活動の良いことや、由良のいい所を紹介し、ぼくたちは、すごく、めぐまれた環境にいるんだなあと思いました。

発表の中で、ぼくの記事とおじいちゃんの記事を発表するのは、少しはずかしかったです。

ぼく達は、あと少して、小学校を卒業するけど、心のふれあいを広げ、ぼく達に何ができるか考えていき、もっと、環境を大切にしてほしいという事を発表しました。

言葉もまちがえずにいえたし、練習を、いっぱいしたかいがあったなあと思いました。

いい思い出ができたと思います。



文化祭について

塩森 啓子

毎年恒例となっており、由良地区文化祭が今年も、十一月三日由良の里センターで行なわれました。

私も毎年、友人と顔を出させて頂いておりました。

今年は婦人会本部役員という事で、昨年、一昨年の役員さんのアドバイス、資料を参考に、又、たくさんの方の協力を得て仕入等、何日も前から準備にとりかかっておりました。

前日も、早朝よりうどんの出し取り、ぜんざいの小豆煮、お漬物等の準備をしました。

大きな鍋も準備はしてもらっていたのですが、七百食分とは予想以上に苦労があり、大量に作る難しさを実感しました。

又、たくさんの方々陰ながら協力のお大きさも感じさせられ

感謝致しております。ありがとうございました。

さて、当日の朝を迎え、役員全員揃い、各担当に別れて準備にとりかかりました。

準備も終えた頃、少し早めのお客さんからの開店となりました。

うどん、ぜんざいコーナーでは、次第にお客さんが増え、たくさんの列になって待つておられました。

鍋に入れて持ち帰る人、近所の人といっしょにお話をされながら食べておられるおばあちゃん、わいわい楽しそうにおうどんを待つ子供達、とても微笑ましい光景でした。

食べ終えられて、わざわざ調理室まで足を運び「おいしかったよ」「ごちそうさま」等、声を

かけて頂き大変嬉しく思いました。

外のバザーでは、途中から大雨になり、テントの中での販売となりましたが、たくさんの方のご協力により完売する事が出来ました。

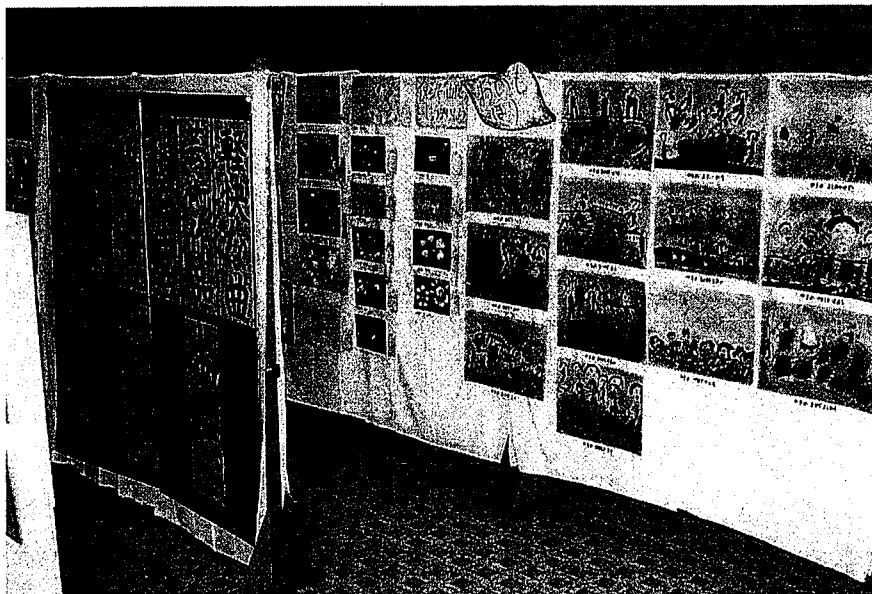
又、この文化祭に備えて早くから、お野菜を作っておられる方もあります。勿論お野菜だけでは無いと思いますが、文化祭に向けて日頃から心掛けて、作品造りをして

おられる方もあります。その成果であります、二階での作品展もすばらしく、特にこれといって、趣味の無い私にとつては、羨ましく拝見させて頂きました。

年に一度、由良に住む小さい子供からお年寄りまでが集まり顔を合わせ、色々な力作を持ち寄り、交流が出来るすばら

しい一日であると思います。

お世話になります方々には大変ご苦勞様ですが、いつまでもこの文化祭が続き、発展していきます様心より願っております。ありがとうございました。



成人式を迎えて

木谷佳美

一月十四日、待ちに待った成人式を迎える日が来ました。心配された天候もこの日を祝福してくれるかのように晴れわたってくれました。

式場へ行くと久しぶりに会う友達と話がはずみ、とても懐しく楽しい時間を過ごしました。

私は成人式の実行委員会をやらせてもらいました。実行委員会の中で、今年はどうな成人式にしようかと考えていたら、「高校時代の恩師からメッセージを頂いて、スクリーンに顔を映そう」というアイデアが出ました。その後、話し合った結果、このアイデアでいくことにしました。高校へ行き、メッセージを頂いて、デジカメで顔を撮ったものを編集してもらいました。

式が始まる前、みんなが席へ

着いた頃を見計らい、「恩師からのメッセージ」という題で上映しました。先生の顔が映った瞬間、「うわあ懐しい」「先生変わってない」などみんな笑いながら感想を言っていました。このように恩師からメッセージを頂いたり、スクリーンに映したりするなど、今までに前例がなく、うまくいくか、みんな楽しんでくれるか心配でしたが、大成功のうちに終わりほっとしました。

また私は、成人の代表として答辞を読まさせてもらいました。今までそういう大役をやったことがなかったのです。不安でいっぱいでした。実行委員のみんなで文章を考え、いろいろと意見を出し合い、すごく良い答辞が出来ました。

式が終わりに近づくにつれ、

緊張とうまく読めるか不安で泣きそうになっていました。舞台のそでに行く時、友達が「がんばれ」と言ってくれた一言で少し緊張がほぐれました。いよいよ答辞の時、舞台へ出ると何百人もの視線がこちらへ向いていて緊張もピークに達してしま

た。客席や来賓の方々に一礼をし、市長と向き合い読み上げて

いる間ずっと手と足が震えていました。無事読み終わったら、

市長から握手していただき、その瞬間緊張から解放されました。

一度も間違えずに読めたことに今度は満足でいっぱい、すぐくいい記念、思い出になりました。

でも、もうこういう大役は心臓に悪いので正直やりたくないと思いました。

「成人」イコール「大人」というイメージがありますが、今は親に頼っている私達なので全然自覚が湧きません。社会人になると、嫌でも湧いてきて、世の中での厳しさを痛感すると思

います。そういう時は先輩方に相談し、指導してもらい、一歩一歩常識ある大人になっていきたいと思

います。これからどんどんいろんな事に挑戦し、失敗を恐れず自分を磨いて強い人間になりたいと思

います。最後に、無事成人を迎えることが出来たのも、今まで私達を

支えてきてくれた家族や周りの方々のおかげです。今まで本当にありがとうございました。感謝の気持ちでいっぱいです。一

歩一歩と大人に成長していく私達をこれからも見守っていて下さい。



由良神社例祭祭禮神幸について

由良神社宮司 嶋谷卓之

花の御所八幡宮由良神社祭禮行事の中心は大神輿の神幸(行幸)にあります。

御神霊を遷御する遷座祭から始まりです。その後由良氏子衆の担ぎあげにより巡幸となります。由良氏子区の安泰と平安除災開運を祈願するものです。

古来よりの伝統慣習行事として重要な文化遺産なのです。そこで次に順を追って神幸行列について解説致します。

一、先払—これは神輿の神幸先手を清め榊の枝と御幣が使われます。
二、金棒—鉄の棒で災禍事を除く役割があり、地につけて鳴らして歩く触れの意味もあります。
三、猿田彦命—先頭に立って歩く道案内の神であり方位魔除け

の神として道祖神と結びついた旅の安全守護神です。

四、社名旗—由良大神(八幡神)を名記したものです。

五、真榊—榊の枝に紙垂・麻をつけ清浄を示すものです。地方

によっては杉・玉椿・樅・柘植の木が用いられることもあります。

六、三種の神器—(神宝)天照大神と高御産靈神から皇

孫に授けられた八咫の勾玉・八咫鏡・天叢雲劍。

(草薙劍)の三つをさす。神器は皇位の御璽です。

七、金幣—金は黄金で幣は宝の意味です。大神を称えるしるし

です。八、銀幣—金に次ぐ銀は清浄を意味する宝物で大神をたたえる

しるし(璽)です。九、錦の御旗—高級の絹織物で

鎌倉時代から月・日を刺しゅう

し大神のしるしとしたものです。

十、祭矛—古代より銅劍・銅牟

など祭祀に用いられ大神の守護

証として祭具として伝わっている。

特に武神には弓矢等共に数

多く用いられた。

十一、四神旗—東、西、南、北

の守護を司る神です。

東北—青龍(青)—表鬼門

南—朱雀(赤)

西南—白虎(白)—裏鬼門

北—玄武(緑)

中央—神(紫)—(黄)高

貴四方祓の五色を意味します。

十二、比礼矛—牟にはヤサなど

種々あり威儀物として用いられる

神宝です。

十三、御太刀—祭具としての神

宝で守護の威儀物です。

十四、御弓—大神の守護の威儀

物で祭具として用いられた。

十五、御かざし—飾り金で祭具

神宝の威儀物です。主として女

神に捧げられる神具です。十六、御幣—神に捧げ供する宝

の意味です。和紙は古代社会に

於て金に匹敵する位、貴重な宝

物であり、神の依代として用い

られた。従って木簡等木材の豊

かな我国では木札に文字を書き

しるした。神に願いごとを書き

言霊として、笏を用い今に伝え

られています。

これらの祭具(神具)は神輿

の巡幸には欠かせないものです。

これら祭礼行事は古代社会より

全国各地で歴史、文化遺産とし

て永々と先祖伝来守り伝えられ

ているものなのです。当由良に

おきましても皆様方の御蔭で歴

史伝統文化として後世に伝えら

れることは誇りであり、素晴ら

しいことだと思ひ、真に感謝の

念にたえません。今後とも皆様

方の御尽力を賜りますよう宜

しくお願い致します。氏子の皆

様方の結束あつてこそ祭礼は継

承されていくのだと改めて思ひ

しることができました。

まとまりのない文章で真に恐縮です。

旅は気儘に……。

パート5

丹後由良ターミナルセンター

旅行、バンザイ！バンザイ！

マキ

◎二〇〇一、十一月二十六日

大阪の客

るのに、列車がきました。ありがとう由良。さようならー。

◎H十三、十二月六日(木)とくっても ☆

母さんと、五年？六年？振りに二人で旅行に来ちゃいました！

兄ちゃんが一緒にやなくって、

チョット残念だけど、海がメツチャ×²、きれくて、空気が良くって

て幸せな気持ちっ♡。明日になれば帰らなければいけないので

いやだけど、今日はいーっぱい楽しみたいと思います。そして、帰ってもガンバルゾ！

また来まーす。NAOMI ♪

◎H十三、十二月三十一日(月)晴

由良岳へ登る。(六四〇m)

一面の雪化粧。登りは感じな

かったが、下りは思ったよりきつかった。以前から地名にひかれていた所だったので、これた

事がうれしかったです。今年最後の山行となりました。

義雄、信子、幸あれ……。

◎私は、由良恭代といえます。

名字が、『ゆら』なので、この

駅にたち寄ってみました。入場券を買って帰ります。

◎二〇〇二年 一月四、五日(金)

or (出)

初めての四人旅行、楽しかったネ♡。また来るでー。汐汲苑

でカニ食べまくり♡。もうサイコくの気分です☆ 雪景色に、

虹が出て、すごくキレイやった！

よい成人旅行になりました。

今年も何とかがんばるので、皆んな一生ヨロシクネ(笑)

なお

カニづくし最高！ また来る♡

ちー

楽しい二日間だったヨ！

いい二〇才の記念旅行になった

ヨ♡♡ みんな大好き♡ ハル

天橋立に行こうと思ひ、車を

走らせていたら、丁度正午にな

り身体を休める為に立寄りまし

た。静かな、良い町です。

川畑

机、柱等のらくがきを少しで

もなくそうと思いついたこの旅

日記も一応No.二十二となりまし

た。うつぶんばらしとも思われ

る様なものもあつたりですが、

これからも続けてみたいと思ひ

ます。落書が楽書であればいい

のに……。

◎平成一四年、二月二日

ゆらゆらと気まぐれに由良駅

に下車。明日は大雪だから、早

いめに帰ったほうがよいでー！と

車掌さん。汽笛を鳴らしながら、

「カニとお湯なら、やっぱり由

良や」と、自慢げな顔。人なつっ

こい顔で、おしえてくれました。

書きたいことは、いっぱいあ

一言。地域の方々から、お花、

おたすけ傘、備品等を寄贈して

いただいております。四、五年

程前から、年末に近い寒い頃

栗中生徒会のボランティア清掃

として、生徒さん、親子さん、

役員の方、先生による、駅構内、

トイレ等を年一回、きれいにし

ていただいております。駅の天

井はとても高く、出来ない部分

であり、ひどいくもの巢に、少々

悲しいものがありました。それ

をすっかりきれいにとってもらっ

た事に感動を覚えました。いろ

いろな所から、それぞれご協力

ありがとうございます。



由良の海

東京丹後由良会副会長 川端邦雄

「昭和三十一年（一九五六年）に卒業した西舞鶴高校の同級生は、私をカンちゃんと呼ぶ。ルーツはラジオドラマ「鏡の鳴る丘」に登場したカンちゃん。貧しい生活の中で、いつも明るくニコニコしていた少年にイメージが重なったらしい。同級生の坪内良博京大教授や松野儀三九工大教授も「社長になって、もうカンちゃんではなくなったネ」と言うが、呼び方は変わらない。

東京近辺にも同級生の仲間が数人住んでいる。会社生活をリタイアして、もう気楽な身になったためか、私のストレス解消のためと、あれこれ声を掛けてくれる。その一人が、若い頃病気をしたために年令的には二歳年上の川端邦雄さん（元小野田化

学工業勤務）。冷静で優しく、仲間内で一目置かれている存在で、私にとっては命の恩人である。

学生のころ、京都府宮津市の丹後由良海岸に住んでいた彼と二人で泳いでいた時のことだ。沖に出たものの波が高く岸に戻れない。恐怖感から彼に助けを求めたが手を貸してくれず、潜って岸に向って泳げ、と突き放した。やっとのことで砂地に足がつくところまでたどり着いた。

今でも彼は、あの時、手を出していたら抱きつかれ、二人とも溺れていただろうという。しかし手を差し伸べなかったことに、後ろめたを持ちつつづけているとも。

海好きヨット好きの彼は船を持ち、生涯の趣味としている。

最近日本セーリング連盟で、国体や全日本社会人選手権の審判をやっているらしい。霞ヶ浦マリナーに來いと誘いを受けているが、実現できないままだ。

この文が、平成十二年十月十二日付、日本経済新聞交遊抄欄に、「命の恩人」と題して掲載されました。著者は、宇部興産社長の常見和正さんです。「君のことを書くから」といわれていたものの、こんな想い出を彼が持っていたとは、普段のつき合いで意識したことがなかっただけに、あらためて、友だちとはありがたいものだ、彼に感謝の読後感を伝えました。

ふるさとに、海を持った幸せを、噛みしめています。

子供のころより、病弱で、病院生活が長かっただけに、元気でいられる時は、テニスをはじめスポーツは何んでもかじった。金沢の大学へ行ってからは、ヨットに魅せられました。なぜヨットなのかは、自問自答するが、

わからない。健康にいいのはたしかです。ただ、これだけははっきりしています。「海」が好きなのです。

金沢の海も、日本海。由良の海に、繋がっている海でした。昔、由良の船頭衆が操った北前船も来たであろう加賀の海。生れたときから五体にしみついてきた潮の香が、ふるさとの香りも、海にひきつけてくれたのかもかもしれません。

公民館が発行した「丹後由良の歴史」のなかで、由良船頭衆の研究が発表されていました。興味深く拝読させていただきました。

東京丹後由良会で、配付していただいています。「公民館だより」も一字一字大切に読んでいます。内容もそうですが、誌面から由良の海の潮の香が、ただよってくるような気がしています。

生れ育ってきたふるさとと、そのふるさとの海の潮の香りが、

「古い」に溺れずに、しっかり
生きよと励ましてくれている。
そんな日々です。

川柳

大森美智子

山門のあたりに指切りしてしまう

サバナナに生きるも死ぬも神の手に

知らん振り通す友情だってある

飯沢鳴窓

埋もれ木のほむらを誘う風に会う

頂点は孤独嫉妬の矢も受けて

出会い系サイトに畏のあるリスク



「中国の学生に、由良を見せたい！」

東京都江東区 大森和夫・弘子(旧姓・清水)

由良を出てから約五十年(和夫)と三十八年(弘子)になりますが、それぞれ兄(大森雄三郎)家族の家や実家があり、お盆の頃の帰郷を毎年の楽しみにしています。

しかし、由良小学校時代の同級生に再会する機会はほとんどありませんでした。東京では、

宮本和彦君に一、二年に一回会うだけです。ところが、一昨年夏帰郷した際、枝川隆亮君(公民館主事)の音頭で、中西忍君、岡本康弘君、蒲原(旧姓・山下)夏江さんと一緒に、六人の「ミニ同窓会」を楽しむことが出来、故郷への懐かしさが一気に戻ってきました。

私達は十四年前からボランティアで、中国の若者と「日本語交流活動」を続けています。五年

前には、中国・上海市に日本語学校(上海朝日文化商務培训中心)を設立しました。今、一つの夢を持っています。「中国で日本語を勉強している大学生を由良に招待し、由良の皆さんと交流してもらおうこと」です。

毎年三、四回は中国を訪問し、これまでに中国の五十以上の大学の学生や先生方と「日本語で」交流を続けてきました。上海の日本語学校では、現在、八百人近くの学生が日本語を勉強しています。中国語が全く分からない私達がどうしてこれだけ長く中学の若者と交流を続けることが出来たのか、不思議に思われる方があるかもしれませんが、答えは簡単です。日本語の上手な中国の若者がたくさんいるからです。

中国の学生は、首都の東京や古都・京都についての知識はありますが、「京都府宮津市由良」の名前を知っている学生は、私が会った学生の中には一人もいませんでした。私が「日本三景の一つである天橋立のある所……」という話をする、同志社大学や京都大学に留学したことのある先生方の何人かが「天橋立は聞いたことはありません」という程度です。

そこで、「森鷗外の山椒太夫という小説に出てくる所」「百人一首の和歌『由良の門をわたる舟人……』に出てくる」というような話をする、学生も急に心を示します。

毎年、中国で日本語を勉強している大学生を対象に「日本語作文コンクール」を実施しています。昨年の「第九回」は、中国の九十四の大学から千六百二十六編の日本語作文が私達のところへ送られてきました。昨年十一月に、中国・南京市の南京

農業大学で表彰式を行い、中国各地の大学から三十一人の大学生（男・八人、女・二十三人）を招待しました。表彰式の後、懇親会や日本語の歌のカラオケ大会などで盛り上がりました。

何人かの学生と懇談した時、「私達の故郷は、海あり、山あり、川あり、の土地。人情豊かな、山紫水明・白砂青松の美しい所」と話すと、「二等賞」に選ばれた遼寧師範大学日本語学部（大連市）の女子学生は「是非行ってみたいですね」と目を輝かせていました。一等賞の女子学生は副賞として、三月中旬に「二週間・日本に招待」しますが、残念ながら今回は日程の都合で「由良見物」を実現することは出来ません。

これからも中国の学生との日本語交流活動を続けます。いつか、中国の学生を由良へ招待したいと思っています。その時、由良の皆さんとの交流会を是非お願い致します。

あいさつ運動標語

- あいさつは 私とあなたのドッキング
- あいさつが飛びかう町に明るい未来
- こんにちは!! って みんなの笑顔に合いたいな
- あいさつで知らない人と 知り合いに
- あいさつは 今日も一日 元気な素
- いいかぜは あいさつにのって やってくる

由良あいさつ運動推進協議会



由良に住んで四十年

思い出すままに (八)

選挙あれこれ (3) 四方 寿朗

人の自覚が大切だ。

藩政時代の村治

明るい選挙を推進するには(続)

*激しい競争には当然多くの経費

*全由良地区統一候補を決めるため、由良地区一本の組織をつくる必要がある。そしてこれを日常活動を通じて育成する。

*自治会とは何か、行政の末端でよいのか、その歴史的な成り立ちなどについて学習の必要がある。

*地域の自治会組織を選挙に利用しないこと

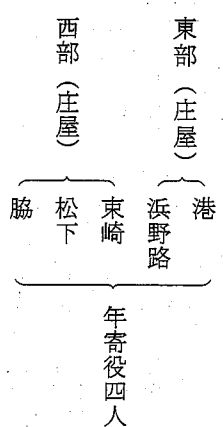
*選挙法で許されている電話戦術などが、市議選では通用しない

*区長は、たとえ個人の資格でも選挙運動に参加すべきではない。
*選挙とは何か、理想の選挙とは、などについて、学習の要あり。
*幸せを求めるための選挙が、逆に我々を不幸にしている。

*選挙法で禁止されている行為の意義を学ぶ必要がある。
*人間として選挙に勝つよりもっと大切な事があるのではないか。
*このような選挙についての話し合いを、今後も度々開くべきだ。これは公民館の仕事だ。
*結局は選挙をする地区民一人一人の自覚が大切だ。

*昭和三七年の選挙では自治会の申し合わせで、地域推薦が禁止されたので、四一年程の激しい運動は見られなかった。候補者と区長が固く申し合わせ、一般にも公表して戸別訪問に來られたら、運動員にその非を咎める位の積極性が地区民に望まれる。

以上今から四十三年前、由良の六地域を回って、各公民館で話し合った時に出た主な意見の集約である。昔は何故こんな市会議員になりたい人が多かったのか、由良からの立候補者が一人になったとは言え、最近の市会議員の選挙は、幸か不幸か何と静かになったことだろう。宮津市の由良以外の他の地域でも、同じ傾向が見られるそうだ。時代とは言えその原因を皆で考えてみたい。



年寄役ハ庄屋役アラザル部落ニ置ク
 浜野路ハ庄屋アルモ置ク
 庄屋、年寄役ハ官選、五軒ヲ一組トシ
 組頭ヲ置キ責任ヲ有タシム
 組頭ハ民選

明治五年 大庄屋を大郷長更に区長と改め各村庄屋を戸長、年寄役を副戸長と改称せらる

村自治組織 (昭和七年)
 執行機関
 村長一區長 (七区)
 決議機関

- 村会 (村会議員十二)
- 第一区(臨) 集會議員 十二 (組頭制)
- 第二区(松下) 集會議員 一級五 二級五 (選挙制)
- 第三区(東崎) 集會議員 一〇 (選挙制)
- 第四区(濱野路) 集會議員 一級一〇 二級十一
- 第五区(港) 集會議員 一〇 (区長指名)
- 第六区(下石浦) 伍員 二
- 第七区(上石浦) 集會議員 一〇 (区長指名)

私にとつての『和江の渡し』

浜野路 大森 孝

今も車で通る。この『和江』の岸边は淀みとなつて、対岸の南の方には宮津線の東雲駅がある。川は幅が広くなつて、川面は日射しをうけて、キラキラと細波は光っている。それは冬の寒さの中でも耀くものである。

今は廃止されて見ることが出来なくなつてしまつたが、嘗てこちら『和江』の岸边から淀みの向い側の『中山』の岸边まで、渡し船が就航して居り、船頭の老人が携わつてみえた。懐しまれる情景となつてしまつた。

……村の渡しの船頭さんは今年六十才のおじいさん
年齢はとつても船をこぐ時は、元氣一ぱい船がしなる

船がしなる……
少年時代の私が時にふれて耳に馴染んだこの唄がある。臃ろ

な現在の記憶では、唱歌の時間ではなく、国語読本を拵けて覚えようである。それは兎も角、『大森よ！お前もお爺になつたな！』出逢うなり、大分県中津の出身の戦友が、私の顔をみて最初に放つたのがこの一言であつた。

海軍兵学校の同期会で、久しぶりに出逢つたら、彼には船頭の老人をはるかに超えた私。七十才台を三つも越えれば、将に完全なお爺の筈であつたであろう。兵学校で思い出すのは、この渡し船で、いわば育つて人となつて行つたとも言える畏友がいた。

彼は和江に住居があつて、加藤吉宏君、舞鶴中学へ入学してより卒業まで、さらに京都へ出て、

京都繊維専門から、京都大学へ入り、卒業して、社会人として大をなして、かのモーターゼー

ションの始まる、昭和三十年代に至る迄を、実に長い間『和江』の渡し船を利用し、その恩恵を受けている。思えば加藤氏の人生に占める渡し船の巧用は、測り知れない。彼の少年時代から、青春に在つて、通常の一日の交通手段は、早朝と午後若しくは夕刻の両度は、この渡し船を外してはあり得なかつたからである。

彼の旧制中学校生徒の時期に限つてみても、通学のための足である渡し船の桎梏は絶対的なものと言えた。
朝な夕なに、利用した船は小さなものであつたが、少年がこの舟で思い描いた夢は屹度大きなものであつたに違いない。

彼は、此岸から対岸へのゆきかえりの中で、耀く将来を描いていたであろう。そして馴染みの老いた船頭と会話を交したであらう。

演歌に『矢切の渡し』というのがある。私は好んで、過去を思い出す際に、苦難を超えた時

をふり返つて歌う。作詞家の石本美由起先生は陳べておられる……〔三番〕

〔どこへ行くのよ……
知らぬ土地だよ……
揺れながら船が咽ぶ 矢切の渡し（中略）身を寄せながら明日へ漕ぎだす 別れです〕

勝手に私が矢切の渡しの調べを、和江の渡しにイメージとして重ねている中に、ふと加藤吉宏少年が体験したであろう悲壮な夏の終りの一日があつたことを思い出した。それは十六才になつたか、ならぬかの年端もいかぬ少年兵としての彼の逸る思いを遮つたのもこの渡しだったことだ。則ち、一九四五年、かの終戦のあと加藤はいわば異界の体験であつた海軍兵学校生徒を半年過して後、帰心矢の如くで、万斛の思いを、話題を胸一杯にして、東雲駅に海軍の笈を背負つて降り立った時、前方には大河が非情にも行手を阻み、対岸には人影すら無かつたので

あった。千秋の思い、里心はこの和江の渡しで無惨にも断ち切られる。このもどかしい思いやいらだたしきは、彼の人生につ

由良の地名

—その三—

丹後と紀伊の由良

小谷 一郎

きまとうものの、それらを一つ一つのりこえて、彼は大をなして行ったのであった。

前の二回は、史料の読み方を間違つて、丹波の由良（現兵庫県氷上郡氷上町）と伯耆の由良（現鳥取県東伯郡大栄町）を丹後の由良と思つた先人のあとを少しばかり考えてみました。それにしても、この由良という地名が各地にあります。小字の分までは調べてはいませんが、どれ位になるか分りません。大字の分まで、分っているのは七ヶ所あります。地名が同じということ、其処に共通のもの—地形や景色或いは歴史的、伝統的に—があつたということはできません。例えば、山形県鶴岡市宇由良と鳥取県大栄町由良宿に行つ

てみますと、海辺にあつて砂浜をもつた、この丹後由良と同じ

地形、景色の土地でした。それは、海辺又は川辺という傾斜した処にあつて、其処に、水の力というか打寄せる大波、小波によつて砂をゆり上げて出来た平地という意味をもつた土地が由良—氷上の由良は油良とサンズイ扁のユですが、「ゆり」「より」「ゆる」「よろぎ」と言いあらわされる土地も同じ地形の土地といえます。（広辞苑二二六三頁参照）

そして「由良の戸」について広辞苑を引いてみますと、「①紀淡海峡と②京都府舞鶴市の北西、

由良川口。川底が深く福知山まで舟運がある。」と記されています。そして①も②も歌枕とされています。（前掲書参照）

勿論、歌枕といつても、由良といえ、小倉百人一首にある曾禰好忠の歌くらいしか知りませんから、この歌一首で丹後由良を歌枕—和歌の名所にしたのかと驚いたものでした。歌枕の地という名所は、和歌にたずさわる人達が親しんできた所という他にない土地であります。この丹後由良には、歌枕に関連した一つの史跡があります。脇の稻荷神社の境内に建っている所謂「由良の戸の碑」がそれです。

昨年十月、由良の戸の碑を読む機会がありました。私としては、初めて由良の戸の碑面とともに向き合つて讀んだことになりました。碑面の撰文は加茂季鷹のもので、この人は歌人であるばかりでなく万葉集に委しく、また名筆家でもありました。その名筆家の文章でありま

す。それも「万葉仮名」という漢字の音訓を日本語の表現に利用、特に、万葉集の歌の書法として用いたもので書かれたものです。（広辞苑二二〇二頁「万葉仮名」の頁参照）私はこの時、由良郷土館に保管している碑の拓本を利用して讀むことにしました。その内容は次の通りです。その釈文、

ひと歳若狭の小濱に遊しかへさに天橋立を見むとて丹後の由良戸を舟にて渡りしに殊にはよかりしかは好忠か歌を思出て

ゆらの戸に梶を絶しは昔にて安らに渡るけふの楽しさと口すさひしを此あたりしるしめす君聞しめして碑に残さまほしと乞給ふは紀國にも同名所あればまとへる人の為に彼好忠は此國の掾に成て曾丹後と世人にははれし事古書に見ゆれば成へしとはかり侍りて白地に老筆をとり侍る也穴恐々々

す。それも「万葉仮名」という漢字の音訓を日本語の表現に利用、特に、万葉集の歌の書法として用いたもので書かれたものです。（広辞苑二二〇二頁「万葉仮名」の頁参照）私はこの時、由良郷土館に保管している碑の拓本を利用して讀むことにしました。その内容は次の通りです。その釈文、

天保六年五月十三日

八十三隻

正四位下賀茂縣主季鷹

此処にいう好忠は平安の歌人で曾禰好忠であり、その歌というのは、小倉百人一首の中に入っています。

由良のとをわたる舟人かぢをたえゆくへも知らぬ恋の道かな
(出典「新古今和歌集」卷十一恋一(一〇七一))

であることは多くの人が知っておられると思います。

新古今和歌集は元久二年(一二〇五)三月に編さんされましたが、好忠はこの時代の歌人ではありません。好忠が「ゆくへも知らぬ」と歌ったのは、それより二百四十五年も前の天徳末年、好忠三十歳代の頃であったのです。この間には、勅撰の和歌集が編さんされたのは五回ありましたが、鎌倉時代の新古今に藤原定家を選ばれるまで秀歌とは認められませんでした。また好忠は、性格的にも平安貴族

達に受入れられなかったといわれていますが、それにしてもその経歴は余りはつきりしていません。例えば丹後掾であったといわれますが、丹後下國の史料は、まだ見付かっていません。其処で一つ考えられることは、

当時、家格はよいが表立ってはいない余り人気のない権門家に入りしており、その人の力によって丹後掾の官職を授けられ、それに相当する給与を受けていたのではないかということでは

読み方についても、これまで「加佐郡誌」に掲載されている内容と違っていることに気付かれた人もあったかと思ひますが、「殊にはよかりしかは」の部分の書法は「殊耳、盤与閑利之加伐」です。この部分が何故これまで読みきれていなかったのか。異なつたまゝで今まで済んできたのか。これから調べる必要があると思つています。もう一つは、読み方を間違えない字があります。それは「白

地」の読み方です。これは「あからさまに」と読みます。この「あからさまに」も今の世の意味と違って「少しの間」「一寸の間」という意味で、例えば、「とりいそぎということを表わします。

さきに「には」という読みについてふれましたが、この「には」は「海面」のことです。(小学館版「國語大辞典」参照) 万葉集の歌の中に

飼飯の海の庭よくあらし刈薦の乱れて出づ見ゆ海人の釣船
(「万葉集」卷三二五六) というのがあります。その庭はずつと広がり、波は平らにおさまつたさういふ飼飯の海(現兵庫県淡路島の西海岸の海)です。由良の戸という歌枕も、由良川の河口という解釈では風景が余りにも小さくて狭い、そんな景色であつてはならないと考えてきましたし、これでは好忠の「由良の戸を渡る」表現に釣り合

ないのです。「渡る」のは時間的にも空間的にも、ずつと移つていく広がりがなくはなりません。そういう表現であると思ひます。(平一四・一・三一)

編集後記

前号で由良のこどもの元気な姿を紹介しましたが、今回も京都府さわやか賞受賞のニュースが入ってきました。

内容について、水谷校長先生から詳しく書いていただきましたが積年の取り組みが評価されたものと思ひます。

由良出身の大森さん、川端さんから、活躍振りや郷土への想いが届きました。

いつもながら大勢の方々に協力をいただき「公民館だより」をお届けします。情報社会のなかで少しでも多くの情報を今後もお届けしたいと思ひます。

(飯澤)

